

アーバン・ベア

新保 弥代枝 北海道

ブーさんでもパディントンでもありませんアーバン・ベアが札幌に出る
さかなクンは榎野万太郎さんに似てオオカミウオをちやんづけで呼ぶ
紫は危険予報の色となり猛暑、豪雨を地図に標せり

「がんばれよ」現場監督の声のさき真昼の道路で旗ふる若者
健診の結果おほむね「異常なし」脳の検査は受けてゐないが

右の手だけで

朝比奈 美子 千葉

燃焼のおとはこころを淨くする夜空にひらく大きな花火
駅まへにちひさき果物店はあり和音のごとく葡萄並べて
左手を怪我せしわれはむきになり右の手だけでバツハを弾けり
人の世にかかはりもなくあかときを相寄りひかる月と木星
丘の上の稲荷の段の夕照りをリハビリ終へし窓に見てをり

パドル置く

上野 隆紘 千葉

おそらくはこれが最後と旅立ちぬ萩の離島でカヤック漕ぐと
不安がる妻をなだめて決行す八十二歳の夏の長旅

五日ほどカヤック漕ぎにこぎたれば心足らひぬ いざ帰りなむ
愛艇は若き友へと進呈しパドル置くなりこころ涼しく

離りゆくこの島影を忘れじとわれ立ちつくす暑きデッキに

ことばの器

松下菜水 神奈川

短歌とは真水のやうに溢れくるころを容れることばの器

空爆に倒れし彼は友達の友達の友達の友達

空爆を仕掛けし彼は友達の友達の友達の友達

腿熱し このひとに巡りあふまでの伏線のやうな過去の恋愛

どら焼きは夫の好物へうさぎやのどら焼き買へば夫に会ひたし

やつてみませう

松尾佳津予 東京

長男は亡くしたけれど娘二人育てし我にひまはりが咲く

歌十首詠めと娘に言はれたり出来るかどうかやつてみませう

九十をすぎて目が見え聞こえます感謝をしつつ生きてゆきたし

目つむればふるさと越後の海うかび泳ぎたくなる瀬波の海を

鉛筆を三本けづりテーブルにならべて置けりいざ歌書かん

宵祭り

山下佐保 新潟

碧き風ぬらりと通りすぎゆけり蓮の花さくお堀の上を

紅白の市松模様の博多帯きゆつと結んで宵祭りに行く

浴衣きてともに祭りにゆく友のあるはうれしも五十路の夏に

手と足が踊り出したり三味線の囃子の音の鳴り始むれば

最低気温最高となる糸魚川炎暑の海を鹿が泳げり

藟の樹影

志賀 千ヨ子 岐阜

大林寺師の歌碑塔のそのめぐり杉の青葉の風そよぐらむ
梅雨あけの二十日の暑さひたぶるに『ハンチバツク』が芥川賞受く
暮れかたの時間をみせて庭の面に藟の樹影があはく伸びゆく
水やうかんの美^はしき直角崩すとき庭のすずめが舌を鳴らせり
酸素ボンベ曳きて歌会へゆくみちに著我むれ咲けり薄日射しゐる

滝

吉田 美奈子 愛知

ほほづきが照らすこの世に残されて座るゆふべの暈の広さ
新刊のコーナー見れば居るはずもなき人をまた探してしまふ
雲居よりとどろき落つる滝水がさらに雲生む白くしぶきて
垂れこむる雲を引き連れ落ちくだる滝見返ればもう雲の中
店にふとサントナの古き曲ながれ(時)逆流す ビールください

軽石

森田 則子 三重

阿蘇山の土産と孫がわれの掌に載せたる石はマウスの軽さ
水桶に放てば阿蘇の軽石はたまゆら沈み浮きあがりたり
煮え滾るマグマでありし日を秘めて軽石はわが踵をこする
米軍基地を米軍墓地と読み違ふ花眼に真夏の空はまぶしい
カーキ色のゲートル脛に巻きてゐき惚けし父は夏の来るたび

赤の消ゆる日

小坂 喜久代 兵庫

午前一時のままの時計に単3の電池入れると椅子を用意す
恥づかしいなどと言つてはゐられないシルバーカーをわがために買ふ
墓石のわが名の赤をなでてみる赤の消ゆる日われの知らぬ日
この先を思へば心痛むなりわたしは午前三時が嫌ひ
大病の三つくらゐで受けられずかいごにんていしんせいに來て

蜘蛛が知るのみ

中西 正博 兵庫

蟬聞かず、湧く雲も見ず家うちに籠りて暑さをやらはむとす
内に修羅秘めてありしや穏やかにはた華麗に詠みし山崎洋子さん
透きとほる羽根を畳みて草の上に死にゐる蟬よ良き生なりしや
天井に真向かひ両手でグーチョキパーしてゐる老いは蜘蛛が知るのみ
にんげんも動物にして時至らばおのれの死期の疾く見ゆらむか

馬鈴薯

久保田 智栄子 広島

音も無くびたり付きくる後続車バズーカ砲でつき離したい
幸福を育てるごとく新聞と濡れたタオルにくるむ馬鈴薯
地下街は屋外なのかマスクせぬ秋刀魚すいすい横すり抜けぬ
映画なら大音量のオケが響る夜更けて実家に入りゆくわれに
盂蘭盆の帰省あきらめ蟬の鳴く朝ピンクのペディキュアを除る